

資料編

1 豊岡市の歴史・文化の概要

(1) 史跡・考古

本市には数多くの史跡や考古資料が残されていて、今も発掘調査によって新たな発見が相次いでいる。

縄文時代では、神鍋遺跡（日高）で竪穴住居が、中谷貝塚（豊岡）では石錘（網の重り）など漁撈に使用された道具が見つまっている。山や海を舞台に狩猟や採集によって暮らしていた縄文人の姿をうかがうことができる。また、石棒^{せきぼう}などまじないや祈りに使われた道具もあり、見蔵岡遺跡（竹野）では西日本では珍しい大型石棒やその製作道具が出土している。

弥生時代では、駄坂川原遺跡（豊岡）の弥生時代前期の土器に^{もみ}稗痕があり、この頃には稲作が行われていたことが分かる。ただし、貝塚や釣針も見つまっているため、縄文時代のような狩猟採集生活も続いていたと考えられる。後期になると、集落を見下ろす丘陵に台状墓と呼ばれる墓が造られ、破碎した土器や鉄製の武器、ガラス製品などが納められた。また、市内では銅鐸も見つかっており、気比銅鐸（豊岡）は3個体のうちのひとつ（3号銅鐸）が大阪府茨木市の東奈良遺跡出土の鋳型によって作られたことが判明している。このほか、久田谷銅鐸（日高）は意図的に壊された全国的に見ても珍しい銅鐸である。

古墳時代では、森尾古墳（豊岡）から三角縁神獸鏡^{*}が、入佐山3号墳（出石）からは中国製の鏡が出土している。また、見手山1号墳（豊岡）は、6世紀末頃に造られた但馬で最も新しい前方後円墳で、竪穴系横口式石室という特異な横穴式石室をもつ。この他、袴狭遺跡（出石）から出土した琴板に描かれた16隻の船団は、円山川や日本海を通じた交流の様子を描いたものとみられる。実際に、二見谷古墳群^{ふたみだに}（城崎）は円山川に、風谷古墳^{かんだに}（豊岡）やヨゴレババ古墳群（竹野）は日本海に面した場所に立地しており、川や海を経済



写真 47 見蔵岡遺跡出土の石棒



写真 48 気比3号銅鐸
(写真提供：東京国立博物館)



写真 49 ヨゴレババ古墳群遠景

基盤とした有力者の存在をうかがわせる。

奈良時代から平安時代にかけて、日高には国府や国分寺がおかれ、但馬の中心地として栄えた。祢布ヶ森遺跡（但馬国府跡）では、大型の掘立柱建物跡のほか、木簡などの文字資料も多く見つっている。但馬国分寺は一辺 160 m の壮大な規模をもつ伽藍*の様子分かりつつある。袴狭遺跡群（出石）からは礎石建物の他に、墨書土器や木簡などの文字資料と、大量の木製祭祀具などが見つっており出石郡家（郡役所）との関連性が考えられる。平安時代末期になると仏教の力が弱まり末法の世が始まるという末法思想が広まり、経筒を埋めた経塚が作られ、田多地経塚（出石）から青銅製の経筒と經典の一部が見つっている。

南北朝時代から戦国時代には、戦乱に備えて 150 以上もの城が築かれた。三開山城（豊岡）や水生城・宵田城（日高）などは戦乱の舞台となった。此隅山城（出石）には室町時代に絶大な権力を誇った山名氏の拠点が置かれ、城下の宮内堀脇遺跡からは土塁や堀で囲まれた屋敷地や、大量の土師器皿、茶道具が出土している。有子山城（出石）は此隅山城の落城後、織田信長や羽柴秀吉の侵攻に備え、急峻な山の上に築かれた。山名氏の滅亡後に石垣を持つ城として改修された。

江戸時代になると有子山城のふもとには出石藩の拠点である出石城が築かれた。山の斜面を削って造られた本丸、二の丸、稲荷台等の階段状の郭と平地を堀で囲んだ三の丸で構成されているが、近年の発掘調査によって江戸時代以前にさかのぼる石垣が見つっていることから、出石城は有子山城の居館として使われていた部分を城として改修したことが判明した。豊岡城は豊岡藩の拠点だったが、一国一城令により杉原氏の断絶以降に廃され、城のふもとに築かれた陣屋を中心とした町並みが形成された。

各藩では産業の振興が行われ、出石藩では桜尾窯跡での陶器、磁器の生産が開始されて以降、現代の出石焼につながる磁器の生産が行われるようになった。出石焼の窯の中で、昭和 14 年（1939）に構築された徳利窯はヨーロッパ起源の窯構造を持っており、近代化の中で新しい技術を取り入れた姿がうかがわれる。



写真 50 但馬国分寺復元模型



写真 51 田多地経塚の発見状況



写真 52 豊岡陣屋の石垣跡



写真 53 出石焼 徳利窯

(2) 絵画・彫刻

仏像や仏教絵画に表された仏は、大きく如来・菩薩・明王・天・羅漢の5種に分けられる。すなわち、如来は悟りを開いて仏になり、人々に悟りの法を説く覚者（薬師如来など）、菩薩は悟りの境地を求めながら人々を救済する修行者（地藏菩薩など）、明王は如来の命令を受け、怒りに満ちた表情で悪を破る使者（不動明王など）、天は仏法を守るためのインドの神々（四天王など）、羅漢は煩惱を断ち切り、人々の供養を受けるようになった各宗派の祖師など（十六羅漢など）のことである。

城崎温泉守護の寺とされる古刹、温泉寺（城崎）には、多数の仏像が祀られている。本堂に安置されている木造十一面観音立像は平安時代中期の作で、荒々しいノミ跡を残し、素朴さと力強さをあわせもった檜の一木造りである。その左右に立つ木造四天王立像は、いずれも一木造りで、庫裡（僧侶の居住場所）に安置されている木造千手観音立像とともに平安時代後期～末期の穏やかな作風を持っている。山門を飾る2軀の木造金剛力士立像は、怒りに満ちた面貌や筋肉の力強い動きなどから、奈良仏師の一派である慶派に属する中央仏師によって鎌倉時代に彫られたものと考えられる。また、鎌倉時代に描かれた絹本著色十六善神像には、動きを抑え、色調を豊かにした十六の夜叉神像が表現されている。

文常寺（豊岡）の木造聖観音立像は、体長66cmの小仏像で、浅く穏やかな彫りと柔和な表情から平安時代末頃のものと考えられる。

東楽寺（豊岡）の木造四天王立像は、重量感があって堂々としている。これらの特徴は、温泉寺の木造四天王立像をはじめ、松禅寺（但東）の四天王像など但馬各地の四天王像に共通するものである。また、室町時代に描かれた絹本著色両界曼荼羅図は、端正な仏像が鮮やかに表現されている。

蓮華寺（竹野）には、木造聖観音菩薩立像や木造十一面観音菩薩立像をはじめ、鎌倉時代に描かれ、端正な顔と切長の目が特徴の絹本著色大日如来像、金箔を大量に使った鎌倉時代の絹本著色愛染明王像などが



写真 54 温泉寺 木造十一面観音立像
(撮影：藤原次郎氏)



写真 55 文常寺 木造聖観音立像

残されている。

但馬守護・山名氏に深く崇拝された月庵宗光^{げったんそうこう}が開いた円通寺（竹野）には、月庵宗光の頂相^{ちんざう}（肖像画）が残されている。永徳3年（1383）のもので、画には月庵の自賛^{じさん}*がある。

袴狭区^{はかさ}（出石）の人々の篤い信仰によって祀られてきた木造薬師如来坐像は、丸みのある優美な姿が平安時代後期の特色を残しており、胎内にある墨書によって「治承三年」（1179）の作であることが分かる。

総持寺^{そうじじ}（出石）の木造千手観音立像は、檜の寄木造りで胎内に金銅製の秘仏と文書が納められている。文書には、天文4年（1535）に此隅山城主・山名祐豊^{すけとよ}以下、多数の寄進によって造られたことが記されている。

蔵雲寺^{ぞううんじ}（但東）には、阿弥陀如来坐像や聖観世音菩薩立像、千体仏をはじめ、絹本著色十六羅漢像などの仏像、仏画がある。羅漢像は、羅漢や涅槃図^{ねはん}*を得意としていた応永年間（1394～1427）の画僧、明兆^{みんちょう}の筆によると考えられている。これらは彩色豊かで宋画風の筆致が強く生かされているのが特徴である。

経王寺（出石）の三十六歌仙屏風は、江戸時代初めに活躍した土佐光起の作と伝えられ、濃い色使いをベースとした大和絵の技法で描かれたもので、各歌仙の精密な描写と品のある顔立ちから、作者の優れた技能^{しやうへき}を垣間見ることができる。隆国寺（日高）にある障壁^{しょうへき}画は、弘化3年（1846）に岸岱^{がんだい}・岸徳^{がんとく}によって制作された36面の襖絵^{ふすま}である。力強い虎や繊細な花鳥など、2人の得意分野を活かして描かれたもので、日本画の一派である岸派^{きしは}の代表的な作品として知られている。

また、羽尻区^{はじり}（日高）や観音寺区（日高）には、自然の岩壁に仏像を彫った磨崖仏^{まがいぶつ}が残されている。さらに、城崎出身で山水図を得意とした明治期の南画^{なんが}*家、斎藤崎庵^{さいとうさきあん}の作品は、温泉寺など但馬各地の寺院を中心に多数残されている。

このように、市内には寺院だけではなく、袴狭区の木造薬師如来坐像のように各集落が管理している仏像も多い。これは、幾多の人々の信仰を集め、地域で大切に守り伝えられてきたことの証である。本市ならではの保存の経緯として注目できる。



写真56 東楽寺 四天王像（広目天）



写真57 袴狭区 木造薬師如来坐像



写真58 経王寺 三十六歌仙屏風（部分）

(3) 古文書・歴史資料

中世文書

『但馬国太田文』^{おおたぶみ}は、但馬国守護が鎌倉幕府に対して作成した土地台帳で、当時の土地の支配関係や在地の勢力関係を知ることができる。市立歴史博物館と野々庄区（日高）所蔵の大般若経は、もともと三野神社（日高）で保管されていたもので、長寛元年（1163）から建久8年（1197）にかけて、僧立永によって書き写されたものである。進美寺文書^{しんめいじもんじょ}（日高）には、源頼朝が但馬国守護に出した命令書などがあり、鎌倉時代、公家・武家の祈祷所として但馬随一の寺勢を誇った進美寺と中央との関係が示されている。金剛寺（豊岡）には足利尊氏の寄進状*、出石神社には後村上天皇（位：1339～1368）の綸旨^{りんじ}（勅命を受けて記された文書）が残され、但馬の地も南北朝動乱と無関係ではなかったことを物語っている。大岡寺文書（日高）は南北朝時代から室町時代の気多郡内（主に日高地域）における有力者の動向を伝えている。「温泉寺縁起帳」（城崎）のうち現存最古のものは大永8年（1528）に書き写されたとされ、このころの温泉寺の様子を伝えている。妙経寺（豊岡）の中世石造供養塔群は、室町時代前半の妙経寺を中心とする法華宗僧侶や信者の供養塔群である。寺に残る由緒などから、山名氏の在地の有力被官（家臣）らのものと考えられている。

戦国時代には全国各地で戦火により、それまでに作成された多くの史料が散逸した。出石神社と総持寺（ともに出石）も山名氏の内紛に伴う戦火により大きな被害を受けたが、その再興に際しての文書が残されている。山名氏は天正8年（1580）に羽柴秀吉によって滅ぼされたものの、その直後の検地帳も但東地域に残されている。

近世文書

江戸時代には、市域に豊岡藩と出石藩が置かれ、多数の文書や絵図が作成された。このうち、「但馬一国図」などの但馬国絵図は、但馬全域の概要を伝える重要な資料である。また、各郡・村でも郡絵図や村絵図が作成され、その多くは今も各集落で保存されている。

舟木家文書は豊岡藩主・京極家に仕えた重要な家臣



写真 59 『但馬国太田文』



写真 60 野々庄区所蔵 大般若経（部分）



写真 61 進美寺文書（部分）



写真 62 「但馬一国図」(部分)

のもので、豊岡藩の動向や江戸時代の武士の生活を知ることができる。『出石藩御用部屋日記』は藩の公式記録であり、文化12年(1815)から明治5年(1872)までの計693冊が現存する。「但馬出石御城下絵図」など出石城下の絵図とともに、城下町の様子や出来事を記録した貴重な資料である。

町人が残した資料である鳥井家文書は豊岡の名主・鳥井家が江戸時代後半から明治時代初めにかけての約110年間にわたって書き継いできたもので、由利家文書とともに『公私之日記』と題されている。これらには豊岡藩奉行所の依頼による諸調査、銀の徴収・上納、火消しとその指揮、祭礼参拝と世話、町経費の計算などの仕事がかかれ、当時の町方の暮らしを伝えている。日高地域には、庄屋を務めていた長沢家に長沢家文書が残る。この他有力な農民が残した資料も現存し、『懐中錦袋』(豊岡・照満寺蔵)は天明4年(1784)の疫病流行と炊き出しの様子を伝えている。他に細田家文書(竹野)なども当時の有力農民の記録として貴重である。

近現代文書

明治時代以降の資料として、大正時代から昭和初期にかけて豊岡町長を輩出した伊智地家文書があり、円山川改修や北但大震災の様子を伝えている。「円山川改修計画平面図」は、大正時代に行われた河川改修図で、改修前後の当時の地形がわかる資料として貴重である。城崎の旅館「まんだらや」の当主で町長も務めた石田松太郎氏の手記は、北但大震災の記録や、明治時代初めから太平洋戦争期までの政治・経済・社会風俗について書かれた回想録である。その後、城崎地域では城崎温泉文書の整理が行われ、城崎温泉に関する諸史料が網羅された。

また、本市の特徴として、日野辺(出石)や奥矢根(但東)をはじめ、市内の各区において区有文書が現在まで引き継がれていることが挙げられる。その多くは未整理であるが、今後の整理によって、より具体的な地域史を掘り起こすことが可能である。



写真63 舟木家文書



写真64 『出石藩御用部屋日記』



写真65 「但馬出石御城下図」

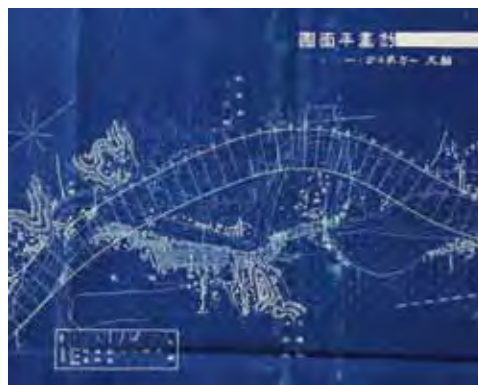


写真66 「円山川改修計画平面図」

(4) 民俗

祭礼と年中行事

① 正月

新年を迎える正月には、各地区で新しい年の始まりを祝い、一年間の無事を祈るさまざまな行事が行われている。

正月に訪れる「万歳」は各家の屋敷や門前で祝いを述べる祝福芸のことである。法花寺万歳（豊岡）は江戸時代後期に京都へ奉公に出ていた村民が習い覚えたことされ、太夫と才若が三味線に合わせておもしろおかしく掛け合いを演じる。

塞の神は道を遮り、疫病や悪霊の侵入を防ぐ「道切り」の神で、田ノ口の塞の神祭（日高）は、1月15日の小正月に大わらじと大ぞうりを神木に奉納する民俗行事である。

② 春

春は田植えの季節であり、豊作を祈る予祝の祭りが*が多い。

出石の初午大祭は、藩主が旧暦2月のうちで最初の午の日に城の大手門を開放して城内の稻荷神社に参詣を許したことに始まり、丹波や丹後からの参詣者も多い。また、雷神社の御田植祭（豊岡）は田植えが始まる前に豊作を祈願する祭りである。松岡の御柱祭り（日高）は承久の乱（1221）の際に円山川に身を投げた幸姫の霊を慰めるために始まったと伝えられ、毎年4月14日に行われている。

③ 夏

柳祭り（豊岡）は柳行李の生産関係者によって小田井神社境内に「柳の宮神社」が再建されたことを契機に始まった。石龍神社（日高）の祭神は白蛇で雨乞いの利益があるとされ、7月に子ども相撲が奉納される。久畑（但東）では愛宕練り込み太鼓の行列が集落を回り、浦安の舞が奉納されている。

盆には先祖を供養する行事が行われる。このうち、轟の太鼓踊り（竹野）は施餓鬼供養のおりに、先祖の追善供養として蓮華寺の本堂横で踊られる。さらに、海岸部では浜施餓鬼が継承されている。万灯（多くの灯明を灯して先祖を供養する祭礼）や仏送りも市内各



写真67 法花寺万歳



写真68 松岡の御柱祭り



写真69 久畑の練り込み太鼓



写真70 竹野の浜施餓鬼

所で行われ、両者が一体化している地域もある。夏も終わりに近づくと、子どもの数が減少する中でも各所で地蔵盆が行われている。

④ 秋

秋には豊作を祝う祭りが多くの地域で行われる。このうち城崎地域では四所神社の例大祭としてだんじりが温泉街を回る（城崎だんじり祭り）。太刀振りは丹後から但東地域の奥藤地区へ伝わった。太刀振りが現存する赤野地区では、赤野神社境内で刀を振り回しつつ飛び越える「宮振り」が奉納されている。また、出石地域では、江戸時代末期の大名行列槍振りの所作が伝承されており、出石お城まつりで披露されている。

通過儀礼

通過儀礼は人生の節目で行われる行事のことで、冠婚葬祭や成人式などがあたる。

出石神社の幟まわし（出石）は、アメノヒボコが瀬戸の岩戸を切り開いた後、意気揚々と帰るさまが表した祭りで、中学生が初節句を迎える男の子の家を回り、輪になって竹法螺たけぼらの音に合わせて囃子唄はやしうたを歌い、子どもの成長を祈る行事である。

竹野地域の一部では、埋め墓（第1次墓）と詣り墓（第2次墓）を別々に設ける全国でも稀な両墓制が現在でも残っている。

生業・伝統産業・娯楽

季節や人生の行事とともに、漁業や海運業に関連して、竹野地域を中心に飾千石船かざりせんごくぶねや海上信仰資料が保存されている。

また、伝統産業に関連したものとして、豊岡地域の杞柳製品やその生産用具、そして城崎麦わら細工の技術保持者なども文化財として指定されている。

「そうだろ節」は江戸時代に祝宴の席で供されたことに始まり、神鍋（日高）で歌い継がれている。但東地域の安牟加神社あむか境内には農村歌舞伎舞台が残っている。また、小城（竹野）や久斗（日高）には江戸時代に人形浄瑠璃が伝わり、そのうち久斗文楽は但馬全域や福知山・姫路方面へ巡行した時期もあった。



写真 71 城崎だんじり祭り



写真 72 出石大名行列槍振り



写真 73 海上安全を祈願した船絵馬



写真 74 久斗文楽の頭かしら

(5) 名勝・天然記念物

名勝

名勝には、景勝地である奇岩や滝、また寺院や民家に造られた庭園などがある。

はさかり岩（竹野）は、洞門が長い年月をかけて日本海の荒波で削られた結果、天井が落ちてできた奇岩で、山陰海岸の奇勝のひとつである。白糸の滝（出石）は出石城や出石神社に近く、その優雅な流れが歌に詠まれるなど、江戸時代から風光明媚な景勝地として知られていた。段の白滝と河床（竹野）は緩やかな流れにある滝で、滝口から続く一枚岩の河床の珍しさから、多くの観光客が訪れている。

寺院の本堂や庫裡の背後には日本庭園が築かれている。市内で一番古いとされるのは、室町時代末期に作られた旧大岡寺庭園（日高）である。池の周りに巨石と立石が配置されており、背後の大岡山の斜面を取り込んで力強く風格ある景色を作っている。沢庵寺の通称で知られる宗鏡寺（出石）には、宗鏡寺庭園が書院の北側に作られている。入佐山から流れ出る水を利用し、池の形を鶴形に、中島を亀形になぞらえた池泉観賞式庭園で、ゆったりと回遊する作りになっている。観正寺庭園（豊岡）は池をもたない石組のみで作られた築山式枯山水庭園で、江戸在住の作庭者である岩崎清光が文化4年（1807）に作ったという記録が残され、庭園史を語る上で貴重なものである。

このほか三木邸庭園（豊岡）、中和邸庭園（出石）などは、庄屋などの民家の庭園として江戸時代に作られた。

天然記念物

自然環境が豊かな豊岡市では、コウノトリやオオサンショウウオが国の特別天然記念物としてよく知られている。

コウノトリは環境の変化や農薬の使用などで数少なくなっただけでなく、豊岡盆地に最後まで生息していた個体を捕獲して増殖を試みたが、実らなかった。捕獲した際に交わした「必ず大空へ戻す」という約束を果たすべく、長い年月をかけて野生復帰に向けた努力を重ねた結果、平成17年（2005）から放鳥を開始し2年後



写真75 はさかり岩



写真76 白糸の滝



写真77 観正寺庭園



写真78 コウノトリ

には野生のヒナが誕生した。今では約 100 羽が全国各地の空を飛び、海を越えて韓国にまで渡っている。オオサンショウウオは平成 16 年（2004）の台風 23 号の後、500 匹以上が出石川流域で発見され、多数生息していることがわかった。河川の復興にあたり、オオサンショウウオも住めるような環境配慮型の護岸に改修された。また、小型のサンショウウオで、絶滅危惧種 I A* に指定されているアベサンショウウオが日高地域の一部に生息しており、環境省によって生息地保護区・同管理地区に指定されている。汽水域のヨシ原には、絶滅危惧種 I B に指定されているヒヌマイトトンボが生息している。

地質・鉱物でも特色が多い。玄武岩の名前の由来となった玄武洞（豊岡）は、もともと採石場だったが、美しい柱状節理がみられたことから明治時代末期に採石を中止し、公園として整備された。海岸線にみられる宇日流紋岩の流理（竹野）は流紋岩と火山灰が再び溶けて固まったもので、美しい渦巻き模様がみられる。また、猫崎半島西側の波蝕^{はしよくおうけつ}穴群（竹野）は、荒波と礫^{れき}が削り出した造形である。一方、栃本の溶岩瘤^{こぶ}（日高）は、神鍋山から噴き出た溶岩流の内部でガスが膨張し、その表面が盛り上がったもので、周辺の奇岩・滝を含めて独特の景観を形成している。

もうひとつ特徴的なのは、何百年も大切にされてきた巨木や社寺の社叢^{しゃそう}などである。日本海の漁師が目印にしたと言われる畑上^{はたがみ}の大トチノキ（豊岡）など、地元の人々によって大切に守り今に伝えられている巨木が多く残されている。そして、ご神木として守られてきた天神社のトチノキ（日高）、一宮神社のケヤキの森（但東）、鎮守の森である温泉寺参道沿いのシイの古木群（城崎）なども、風雨に堪えて今もその姿を誇っている。また、華やかに人々の目を楽しませてくれる長楽寺のチリツバキ（日高）、金刀比羅神社のコブシ（豊岡）、おまき桜（竹野）、ハナミョウガの群落（豊岡）なども、毎年変わらず季節を知らせてくれる。



写真 79 オオサンショウウオ



写真 80 宇日流紋岩の流理



写真 81 畑上の大トチノキ



写真 82 長楽寺のチリツバキ（昭和末頃撮影）

(6) 建造物・町並み

建造物

市内には、寺社建築はもちろん城下町には武家や商家の建物が、山間部には農家建築が残されているほか、城崎の温泉旅館や豊岡市街地の豊岡震災復興建築群など、他の地方にはない特徴的な建造物も多くみられる。

古くから人々の崇敬を集めてきた寺社では、多くの貴重な建造物が守り伝えられている。温泉寺本堂（城崎）は、至徳4年（1387）頃に建立された但馬最古の木造建造物で、和様（日本風）・唐様（中国風）・大仏様（宋風）の3様式が融和した珍しい建築様式で建てられている。観音寺仁王門（日高）は、室町時代中期（15世紀前半）の建立と推測される和様と唐様を混和させた建築様式で、正面三間のうち左右一間に床を張って仁王を安置している。神社では、室町時代中期に建てられた中島神社本殿（豊岡）は、建物の中央に柱をもつ二間社という構造で、全国的にも珍しい。酒垂神社本殿（豊岡）は文安元年（1444）に完成したもので、一間社流造という規模は小さいながら複雑な構造をもち、室町時代前・中期の特色を色濃く残している。久久比神社本殿（豊岡）は、永正4年（1507）の建築で、比較的規模が大きい三間社流造で、大胆かつ細密な技術が集められている。日出神社本殿（但東）は、室町時代末の建立で、庇の組物と蛙股（荷重を支えるとともに、装飾を加えた部材）の間を板壁でふさぐ手法が特徴的である。雷神社本殿（豊岡）は、五間社という規模が大きいもので、江戸時代前期の明暦2年（1656）に建立されたものである。

都市部に比べ農家の割合が多かった豊岡市域には、多くの農家建築が見られる。江戸時代に庄屋を務めた大石家住宅（但東）や赤木家住宅（豊岡）、平尾家住宅（豊岡）は、主屋を中心に多数の土蔵を配し、塀をめぐる伝統的な農家建築の様式を残す建造物である。日高地域には、養蚕の効率化を図った木造3階建ての農家建築が残り、明治時代から大正時代にかけての養蚕業の隆盛を知ることができる。

また、市内には、明治時代以降の近代化に貢献した、産業・交通・土木遺産も多く残る。そのうち、建造物



写真 83 観音寺仁王門



写真 84 中島神社本殿



写真 85 日出神社本殿



写真 86 大石家住宅主屋

では、^{たつとく}達徳会館（旧豊岡尋常中学校本館）や出石明治館（旧出石郡役所）が、西洋の建築に似せて建てられた擬洋風建築として名高い。

町並み

市内には古くからの町並みが多く、それぞれ独自の歴史の変遷を経て、今日まで継承されている。

出石城跡の周囲には、江戸時代に形成された町並みがよく残る。江戸時代初期からの街路構成がそのまま残り、狭い間口、格子窓などの特徴をもつ町屋（旧福富家住宅・現出石史料館）をはじめ、武家屋敷（現出石家老屋敷）、社寺、酒蔵などにより、豊かな歴史的景観を形成している。さらに、出石城^{やぐら}櫓台跡に建つ辰鼓楼^{しんこうろう}や、近畿地方最古の芝居小屋である永楽館など明治時代に建てられた建物は、城下町の遷り変わりを物語る建造物として貴重である。

城崎・豊岡地域は、大正14年（1925）の北但大震災により壊滅的な被害を受けた。震災後、城崎では風情ある町並みを取り戻すため、木造3階建ての建物を建て、そのかわり、防火壁の建築など火災に対する備えも施した。^{おおたがわ}大谿川の護岸には地震によって崩落した玄武洞の玄武岩を使用することで、より強固になるとともに、風情豊かな景観を作り出した。

豊岡では、その復興に際し、但馬の中心都市としての役割を担うべく、駅通り（大開通り）や宵田通りなど主要な街路添いに、公共建物（旧豊岡町役場・現豊岡稽古堂）や旧兵庫農工銀行豊岡支店（現豊岡オーベルジュ1925）など多くの建物が災害に強い鉄筋コンクリート造で建設された。この他、同じく震災直後に建てられた、日本最古とされる木造公設市場（現ふれあい公設市場）、防火対策がなされた和風建築などが個性的な町並みを創り出した。

竹野地域中心部は日本海に面し、港町としての古い歴史を有している。猫崎半島により風待の良港として、特に北前船が往来した江戸時代から明治時代にかけて、その寄港地としてにぎわった。今も、狭い路地の両側に、強い海風から家屋を守るため焼杉板を壁に貼った建物が立ち並んでいる。



写真87 出石明治館



写真88 城崎温泉街



写真89 豊岡稽古堂（旧豊岡町役場）



写真90 焼杉板の町並み